

僕が異世界の女帝だなんて 絶対無理!

上田ながの
挿絵／高瀬むう

立ち読み版



アリア=ミコット

リンカネート帝国で、
皇帝を異世界から
召喚する役割を担う
ミコット家次期当主。



こうかみ

鴻上スバル

現代の少し見た目が女の子っぽい男子。
その見た目が災いし、アリアによって
異世界へと召喚されてしまう。

CHARACTERS

**アナスタシア=フォルム
=マグダナクア**

現在のリンカネート国内でも
トップクラスの権力を持つ
マグダナクア家のお嬢様。



スフィア=オルレオーネ

スバルが通うことになる
女学院の教師。

セレーナ=ローゼス

ミコット家に仕える騎士で、
アリアやスバルの護衛をする、
無口な少女。

（障害でも起こってるのかな？）

そういえばそんなニュースを聞いたことがある。

何とかならないものだろうか、ケータイアンテナを伸ばしたり、振ったりしてみたがやはりどうにもならない。

「これじゃ駄目だ……」

ハアアツと自然と溜め息が漏れる。これでは返信することができない。多分後で拓真からは色々文句をいわれることになるだろう。

（まあ仕方ないか……）

とはいえ、電波が来ていないのだからどうしようもない。ケータイから視線を外す。

「——へ？」

そこでスバルは初めて事態に気がつき、硬直した。

周囲が何故か光に満ちている。視界を覆い尽くすような強烈な光だ。それだけじゃない。何故か辺りの——普段と何ら変わるはずのない近所の景色が、波打つ水面に映っているかのようにぐにやりと歪んでいた。

「な、こ、これって？」

わけが分からず呆然と眩ぼろぜんいた次の瞬間——。

カアアアアアアアアアツ!!

「う、うああああ!」

広がる光に全身が包まれた。

「あ、な、なに? 何が起きてるの?」

目が眩む。事態がまるで把握できない。

やがて視界は回復する。

「ど……どこ? ここ?」

視界に映るのは見覚えのない景色だった。呆然と眩く。

立っているのは何本もの柱だ。決してそれは電柱ではない。ギリシャの神殿とかに使われていそうな立派な柱だ。目の前には祭壇——のようなものが置かれている。

(何が起きてるの?)

わけが分からない。

今度は足下を見る。

「ひ、光って……る?」

そこには円形状に巨大な幾何学模様きかがくが描かれていた。漫画とかアニメに出てくる魔法陣のように見える。薄ぼんやりと青白く輝いているのもそれっぽい。

(夢? ボクは夢を見てるの?)

起こっている事態に対して思考が追いつかず混乱する。

刹那、

「ほ、本当に出た……」

涼やかな声が耳に届いた。

「ひえっ!!」

唐突に背中から声を投げかけられ、ビクリッと身体を震わせる。思わずケータイをその場に取り落としつつ、振り返る。

「だ、誰？」

そこには一人の少女が立っていた。

身長は自分と同じくらい、肩の辺りまで金色の髪を伸ばした少女。どこか猫を思わせるような、少し吊り上がり気味の大きな瞳がこちらに向けられている。透き通るような青い瞳は、心の奥底まで見通してくるかのような不思議な輝きを宿していた。鼻筋はスウツと真っ直ぐ通っている。肌の色は白。まるで絹のようにきめ細かい。精巧に作られた人形のような女の子……。

(綺麗だ……)

小柄で、ゲームに出てくるローブを思い起こさせるような黒い服を身に着け、その上魔法使いみたいなとんがり帽子を被った少女に、思わず見惚れた。

「あ、あの……こ、これってど、どういうこと？ こ、ここは一体？」



呆然としつつ口を開く。事態を把握しなければならぬ。これは現実なのか夢なのか？ それすらも理解できない状況だった。

質問に対し、少女は口元に微笑みを浮かべる。

「……アナタ、名前は？」

鈴の音ねのような声だった。

「え？ その……す、スバルです。鴻上スバル……」

綺麗で可愛い少女に尋ねられ、スバルは取りあえず名を名乗る。

「コウガミ……スバル……えっと……」

こちらの答えに少し考えるような素振りを見せた。

「あ、その……す、スバルが名前です」

日本語を話しているようだけれど、見た目は外国人のように見えるので付け加えた。

「……ふむ。スバルね……。響きは悪くないわ」

「あ、ありがとうございます」

反射的に礼を述べていた。

「スバルって呼んでいいのかしら？」

「は、はい」

「ありがと。じゃあ私のことはアリアって呼んでね」

「アリア？」

「そう。アリア。ミコット家次期当主アリアⅡミコットよ。よろしく頼むわ」
ニコットと少女——アリアは笑う。またも見惚れてしまった。

(可愛いなあ……つて、そうじゃなくて!)
今ほもつと大事なことがある。

「そ、その……これってどういうこと？」

まずは事態を把握しなければならない。

「どういうことか……なかなか難しい質問ではあるんだけど……。簡単にいわせてもらおう……、今日からアナタは皇帝よ。我がリンカネート帝国第十五代皇帝。そういうこと」

「——はあ？」

さっぱり理解できない言葉だった。

皇帝？ リンカネート帝国？ 一体この子は何をいつているのだろう？

「つて、ちよつと簡単にいいすぎたわね。一応説明させてもらおうとね……」

流石に悪いと思ったのか、補足説明が始まる。

「この世界はアナタが住んでいた、あちらとは違う異世界なの。私達は便宜上、こちらと呼んでるわ」

「はあ……異世界ですか……つて異世界いいいっ!!」

思わず大声を上げてしまう。いいいいっ!! の部分が反響した。

「そ、それって本当なの!!」

「事実よ。分かるでしょ？」

「……ま、まあ……」

普通ならば到底信じがたい話ではあるけれど、状況が状況であり信じざるを得ない。

「で、でもなんでボクが異世界に？」

「もちろん……偉大なるミコットの次期当主たるアリアⅡミコットが召喚したからよ」

「しょ、召喚って……な、なんの為に？」

喚び出すメリットが思い浮かばない。

例えばゲームとかに出てくる召喚獣のように強大な能力で大破壊を行うなんて真似は当然できない。乗り物の代わりにもならないし、全知全能の知識を与えるなんてことももちろんできない。それ以外で召喚って何かあっただろうか？

(ま、まさか使い魔にする為とか?)

危険なことまで想像してしまう。

「だから……アナタを皇帝にする為よ。我がリンカネート帝国第十五代皇帝にね」

アリアは腰に手を当てるエッヘンと胸を張る。

ここで彼女についてローブの上からでもはつきりと分かったことが一つ——胸はあまり

大きくない。つて、くだらないことを考えてる場合じゃない!

「だ、だからそこが理解できなくて……。なんでボクが皇帝? だつてボクはその、い、異世界の人間なんでしょ?」

「その通りよ。で、我が帝国の皇帝は代々異世界の人間。ほら、おかしくないでしょ」

見た目の可愛らしさに反して、かなり横暴な少女らしい。

「な、ないでしょつて……。か、簡単にいうけど……。な、なんで異世界人を皇帝に?」

「……。ふむ。まあもつともな疑問ね。その理由は今から四〇〇年前に遡るわ。当時の、こちらの世界情勢は最悪なものだったといわれているの。小国が乱立し、大陸の覇権を巡つて争っていた群雄割拠の時代だったつてね。大陸では覇権を求めて戦争ばかり起こっていた。我が国こそが大陸全土を支配するに相応しい国だつて。でも、どこも大陸を統一なんてできなかつた。結局そんな覇権争いは百年もの長きに渡つて続いたの。で、みんな疲れ果ててしまった。決着のつかない戦い……。失うものばかりが大きすぎる戦いにね。實際民の暮らしも困窮した……。そこで人々は話し合いをして一つのことを決めたの。つまり——自分達を選んだ人間を皇帝とし、バラバラの国を一つにまとめようつて」

「……。でも、それだと一体誰を?」

話し合いで決まるくらいなら、争いなんか起きないはずだ。

「だからこそ、あちらの世界の人間を皇帝にすることになったのよ。こことは違う異世界の人

間——それも皇帝として相応しい人間を喚び出す。そうしてリンカネート帝国は生まれたの。以来、帝国は皇帝が崩御するたびに新たな皇帝を異世界から喚び出すことになった。そして半年前、前皇帝が崩御なされたの。で、新しい皇帝を召喚ってことになったわけ。どう、納得できた？」

「う、うん……」

「そういうわけだからスバル——アナタは今日から皇帝よ!!」

ビシッとアリアに指をさされる。

「い、いやっ……いやいやいや……む、無理だっってそんなの!!」

確かに皇帝が異世界人というのは納得できた。が、それ〳〵自分が皇帝には繋がらない。

なにしろ自分はごく普通の学生だ。これといった特技もない。学校の成績は普通。運動神経も普通——というか、むしろ劣っている。身長も低いし……。

「大丈夫よ。いい、この召喚術は無作為に異世界人を喚び出すものではなく、皇帝に相応しい異世界人を喚び出すというものなの。だから……アナタに皇帝となれる素質があるのは間違いないのよ。まあ、これも運命と思つて諦めてちょうだい」

「う、運命って……そ、そんなこといわれても……」

「うじうじする必要はないわよ。なにしろアナタは一人じゃない。私がついているんだから。このミコット家次期当主である私がね。だから皇帝になりなさい!」

ドンツと胸を叩くアリアは自信満々だ。身体付きこそ小柄だけれど、結構頼もしそうに見える。

「だ、だけど……」

それでも即答はできない。

「悩んだところで無駄よ。他に選択肢はないんだから」

が、こちらが渋っていても少女は余裕綽々だ。

「ほ、他に選択肢はないってど、どういうこと？」

なんだか嫌な予感がする。この展開……まさか……。

「だって召喚する魔術はあっても、送り返す魔術はないから。つまり、アナタはもうこちらで皇帝となるしか道は残されていないの」

「や、やっぱり……」

前振りの段階でそんなことだろうと思った。

「で、でも、そ、それって酷くない？ か、勝手すぎるよ！」

理不尽この上なく、抗議の声を上げる。するとアリアは一瞬弱気な表情を浮かべる。しかし、あくまで一瞬のことであり、すぐにもとの自信満々に戻った。

「勝手なのは重々承知しているわ。だけどね、これ以外にないの」

爛々と輝く瞳で真っ直ぐ見つめられる。横暴この上ないけれど、彼女が心の底から本気

で皇帝を求めていることは分かった。

「……ほ、本当に帰れないの？」

「ええそうよ」

一言のもとに切つて捨てられる。

父や母や拓真の姿が脳裏をよぎった。もうみんなに会うことはできないのだろうか？
そう考えると胸がキュウツと締まる。ツツツと涙が零れてしまった。

「無理な願い。勝手な願いだつてことは十分分かつてる。だから……」
ギョツとアリアがスバルを抱き締めてくる。

「私はアナタを必ず守る。いつも側にいて、アナタの為ならなんでもする。必ず立派な皇帝にしてみせるわ。喚び出した責任は必ず取る」

言葉の中に嘘偽りはないように感じた。ドクンドクンという鼓動が伝わってくる。

「わ、分かったよ……」

他に選択肢はなかった。抱き締められながら、スバルは頷く。

「ありがとうスバル」

礼の言葉は温かみに溢れていた。同時に頬にそつと口付けしてくる。

「えっ」

時が止まったような気がした。茹で蛸みたいに顔が真っ赤になる。

「ちよつとしたお礼よ」

フツツと少しばかり恥ずかしそうな表情をアリアも浮かべた。

「さて……そうと決まったら……」

クルリツと一旦こちらに背を向けると、この部屋——神殿というべきか——の隅に置いてある大きなバッグのようなものを開け、純白のドレスみたいなものを取り出してきた。

「え、えつと……それは？」

「ん？ これ？ これは皇帝のドレスよ。いきなりで申し訳ないんだけど、この神殿を出たら早速戴冠たいかんの儀式を行うことになってるから、その為にしっかりとした衣装を身に付けてもらわないといけないの」

「た、戴冠の儀式？」

「皇帝としての最初の仕事ね。戴冠の儀式でアナタは皇帝として皇冠を与えられる。これによってアナタはリンカネートの皇帝として、こちらに受け入れられることとなるの。ただし、これは即位の儀式とは違うから勘違いしちゃ駄目よ」

「そ、それってどういうこと？」

皇冠を与えられることで皇帝となる。それと即位は同じように感じるのだけれど……。

「まあ今回は皇帝として身分を確定されるというだけのことなの。これによって皇帝として権威が確定するというわけ。で、即位っていうのは皇帝が名実共に国のトップとなり、

政治も行うようになることをいうの。つまり、権威だけでなく権力も握るということ。でも、異世界の人間にいきなり皇帝として全権をまっとうしろなんて無理な話でしょ？」

「ま、まあそれは確かに……」

いきなりこの世界の政治をやれといわれても、正直何をすればいいのかさっぱりだ。

「だからリンカネットでは戴冠と即位を別に行っているの。因みに即位は戴冠から一年後に行われる予定になっているから、そのつもりでいてね」

「一年……つまりその一年で勉強しろってことかな？」

「そういうことよ。一応一年間は学校に通ってもらうことになるから。まあ、私も一緒だから大丈夫よ。それより、早くこれを着なさい」

ズイッとドレスを突き出してくるのでそれを受け取る。

皇帝用に仕立てられたドレス。シルク製だろうか？ とても心地いいさわり心地だ。かなり高そうな代物である。サイズは——問題なさそうだ。そういえばちらりと見たバッグの中には、同じようなデザインのドレスがまだいくつも入っていた気がする。多分どんな相手が召喚されても問題ないように何種類もデザインを用意していたのだろう。

そう、サイズは問題ないのだ。でも、本当に問題なのは……。

「あ、あのさ……これ、ドレスって着ないといけないの？」

「もちろんよ。儀式というものにおいて一番大事なものは形よ。そういう点は、あちらで

も変わらないと思うんだけど、違う?」

「え、ま、まあその通りだけど……だけどその……儀式で着る服ってこれしかないの?」

「そうよ。戴冠の儀式において代々皇帝が身に着けてきた由緒正しいドレスなんだから。どうしたの? もしかしてデザインが気に入らないとか?」

可愛らしく小首を傾げてくる。

「いや、そういうことじゃなくてね……。これって……女物のドレスでしょ?」

「見れば分かるじゃない」

まったくその通りだ。

「だからね……お、男物はないのかなって思って……」

おずおずと尋ねる。すると――。

「はあああああ?」

心底呆れたようにアリアは首を傾げた。

「男物って……本気でいってるのスパル?」

「ほ、本気だけ……」

この答えにフウツと召喚術士の少女は溜め息をつき、やれやれといった様子で首を横に振った。

「ねえ、もしかしてスパルって男装の趣味でもあるの?」

「あ、う、うん……」

取りあえずは従うしかないだろう。彼女に背を向け、プールサイドに肘をかける。

「それでいいわ。よし……じ、じゃあ行くわよ」

そういうながらアリアは背後に回ってきた。そしてスフィアがそうしてきたようにぴたりと背中亲身体を密着させてくると、下半身に手を回してくる。

「え……あつ、そ、そこはっ！ んんん」

伸びた手がスク水の上からペニスに触れた。ジャバジャバと音を立てながら、ゆっくり肉棒を扱き始める。

「すごく硬くなってるわね。昨日より硬いんじゃないの？ ホント男って変態なのね」
などといいつつも、肉茎に指を這わす。

「あ、だ、駄目だよ。こ、こんなところで」

直に触られたわけではないけれど、ゾクリッと背筋を走るような性感を感じた。腰がヒクツと反応してしまう。

「駄目じゃない。ここでやるしかないの」

「で、でで、でも……こ、こんなのすぐに気付かれちゃうよ」
傍から見てあまりに不自然ではないだろうか？

「大丈夫よ。私がやってることは先生と同じことだから。これはただのマッサージよ」

「た、ただのって……んんん」

そんないい分果たして通用するのかなんて考えている最中にも、艶めかしく蠢く指がペニスに刺激を与えてくる。技巧なんか何もなく、本当にただペニスを撫で上げてくれるだけなのだけれど、明らかに自分だけでやる時よりも肉体は快楽を感じてしまっていた。思わず声が漏れてしまう。

「ほら、どう？ どこがいいの？ 正直に教えなさい」

耳元で熱い吐息と共に問いかけてくる。

「ここ？ それともここ？」

質問と共に指先で亀頭部をツンツンと突くように刺激を与えてきた。かと思うと今度は肉茎を優しく撫で上げてくる。そのままスク水越しに肉棒をそつと掌で掴み、シコシコと扱くような動きも加えてきた。

「あつ、あつあつあつ……そ、そこ、そこ気持ちいい」

自然と少女のように嬌声を漏らしてしまう。問われるがまま素直に愉悦を訴えた。

「ふくん、こうやって扱かれるのがいいのね。こう？ これね」

自分の手で感じさせているという事実喜びを覚えているのか、嬉しそうにアリアは笑い、更に手の動きを激しいものに変えてきた。

「はあつはあつはあつ……」

扱けば扱くほど、アリアの息も熱っぽくなっていく。今行っている行為で彼女も興奮しているらしい。そう考えると、スバルの肉体もより熱く、火照っていった。スク水下の肉棒が、興奮に比例するように大きさを増していく。

熱く疼く下腹部。尿意にも似た感覚が湧き上がってくるのを感じた。震える肉先。早鐘のように心臓が脈打つ。

「で、射精でるよ。射精ちやう……」

膨れあがる射精感を抑えることができない。

「いいわよ。射精だしなさい。ほら、射精していいのよ」

じゅこつじゅこつじゅこつ！

手扱きの速度が上がる。

（も、もう——）

これ以上は我慢できそうになかった。

しかし——。

「ちよつとよろしいですか？」

このタイミングで声をかけられてしまう。

「——へ？ あ……アナスタシア……な、なんの用？」

声の主は豊満な肉体をスク水で包んだアナスタシアだった。

彼女のことを警戒しているアリアは眉間に皺を寄せて不機嫌そうな表情を浮かべる。当然手の動きは止まってしまった。アリアはアナスタシアからスバルを背中に隠すように立った。

「いえ、特別用事があるというわけではないのですが、せっかく今日の水泳は自由行動なわけですし、スバル様とお話しながら楽しめたらなあと思ひまして」

アリアの放つ敵意はかなり露骨であるけれど、アナスタシアはまるで気にした様子を見せない。ニコニコと柔和で優しい笑みを浮かべていた。

「なるほど。でも申し訳ないですけどすば——じゃなくて、陛下は今私と一緒に泳ぎの特訓中なんです。ですので、お話してる暇はありませんよ」

「それは分かりますけど……。皆様もスバル様とお話したいようですよ、みんなで特訓するというのはどうですか？」

それでもアナスタシアは引く気配を見せない。柔和な笑みを浮かべながら「いかがですか？」と問うてくる。なかなかできることではない——と、普段なら感心する場面だった。

しかし、今のスバルに彼女の余裕に感心を抱けるだけの余裕はない。現在視界に映るものは、今にもスク水を破いてしまうのではないかというくらいの豊満な肉体だった。

白い肌が水に濡れている。流れ落ちる水滴が、胸の谷間に吸い込まれていくのが見えた。とても柔らかかそうである。昨日押しつけられた乳房の感触を自然と思ひ出してしまった。

が高まった。

(ちよ、や、止めなさい。んっ、くううっ)

(ご、ごめん。だ、だけど、だけでも)

ぬちゅっぬちゅっぬちゅっぬちゅう。

腰が止まらない。限界だった。

(も、もう射精るっ！)

より強く腰に肉先を押しつける。

瞬間――。

ぶびゅぶっ！ どびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅうううっ！

「ひあっ！」

(ちよっ、で、射精てっ)

ドクドクと肉棒を痙攣させながら、スク水の中に白濁液を撃ち放っていた。焦りの表情をアリアが浮かべる。

(ああ、き、気持ちいい。気持ちいいよお)

しかし、彼女を氣遣う余裕はない。腰を引き気味にしつつ、アリアの腰にペニスを押しつつながら、肉先から牡汁を漏らし続けた。

「あ……はああああ……」

射精直前で止められてしまっている為に、肉体は興奮の極致にある。

(射精だしたい。こんなの我慢できない……)

本能が何度も訴えてくる。

「悪いけどそれは——ちよっ」

我慢できそうになかった。負おぶさるような格好で彼女の背中に身体を密着させる。腰が腰にすり付いた。自分の下腹部とアリアの尻の間にペニスが挟まる。勃起した肉棒を押しつけ、腰を前後に振ってしまった。

「はあっはあっはあっ」

自然と息が荒くなる。

(ちよ、な、何やつてるのよ!?)

この行為に流石に焦ったような声を、アナスタシアには聞こえないくらいの声でアリアが告げてきた。

(ご、ごめん。分かってる。分かってるんだけど……)

どうしてだろうか？ 普段以上に身体は興奮してしまっている。

いくら射精を中断させられたからとはいっても、こんな人前で我慢できずにはしたなく腰を振ってしまうことなんて今まで一度もなかった。というか、いくらなんでもそれくらいは我慢できる——はずだったのに。

「どうかされたんですか？」

何が起きているのかさっぱり分からない様子でアナスタシアが首を傾げてくる。

（駄目だ。気付かれちゃう。こんなこと止めなくちゃいけないのに……）

肉体は止まってくれない。

（や、止めなさいっ！）

アリアが離れようとするが、逃がすまいと彼女の腰に手を巻き付ける。無理矢理腰をすり付けたまま、カクカクと腰を前後に振った。

（ちよ、だ、だめっ）

「んあっ」

甘い声がアリアの口から漏れる。可愛らしい声——より興奮を掻き立てる声だった。

「ふうっふうっふうっ」

息ばかりが荒くなっていく。腰の動きも激しさを増した。

「だ、大丈夫ですか？」

流石に様子がおかしいと思ったのか、アナスタシアが心配そうな表情を浮かべた。

「な、なんでもない。なんでも……んっ、な、ないのよ」

彼女は純粹にこちらを心配してくれているのに、自分は最低な行為を行っている。その上、必死にアリアがこの状況を誤魔化そうとしている——その現実に、何故だかより興奮



「え？ ど、どうして？」

思わず問いかけてしまう。その後、自分のいつてしまった言葉の意味に気がつき、カアツと頬を赤く染めた。

「どうしてって……さっきいったでしょ？ 人生最大の快楽を教えてあげるって……。だからね……こっちで射精させてあげる♪」

微笑みながらスカートを捲り上げる。紫色のレースのショーツが露わになった。白い太股が艶めかしい。ショーツに手をかけ、下ろす。

（せ、先生の……）

濃いめの陰毛に隠された花弁が露わになった。秘裂は左右に開いている。剥き出しになるのは肉襞。セレーナのもものと比べて少し色素が濃いように見える。ゆっくりと呼吸するように蠢いているのが分かった。その姿があまりに淫靡で、ゴクリツと喉を鳴らしてしまう。

「大丈夫。先生が全部教えてあげるからね。ほら、ここに挿入れるのよ」

指を添え、ニチャツと陰唇を更に左右に開いて見せてきた。クパツと膣口が口を開ける。愛液が垂れ流れ落ちるのが見えた。

（すごい……。ぬ、濡れてる。先生の……あ、あそこ……あんなにぐちゃぐちゃに……）

陰部を見ているだけで、更に肉棒は大きさを増す。

ゆっくり腰を下ろしてきた。ヌチャツと肉先が膣口に触れる。ヒダヒダの一枚一枚が、それだけで絡みついてきた。

「あんっ……ふふ、ホント大きいわね。楽しみよ」
妖艶に微笑む。

「だ、駄目よッ！ そんなのは絶対駄目!! 止めなさいっ！ こ、このエロ教師!!」
羞恥に固まっていたアリアが声を上げる。今にも泣き出しそうな顔だった。その表情にズキンツと胸が痛む。

「ごめんなさいねアリアちゃん。ここまで来たらもう止まらないわ」
けれどもスフィアには想いは届かないらしい。一言だけ謝罪の言葉を向けると、ゆっくり腰を下ろしてきた。

ぬじゅっ、くじゅるうっ。

肉棒が媚肉の海に沈んでいく。

「あ、は、挿入っ。せ、先生の膣中に——んんんん」
とても柔らかく、そして熱い肉壁がペニスを包み込む。

「あ、お、大きい。んんんん。す、すごく大きいわよスバルちゃん。ああ、いいわ。気持ちいい」

下半身が溶かされてしまいそうだった。まるで全身を抱き締められているかのような錯

覚すら覚えてしまう。ギュウツと締め付けてきたセレーナの肉壺とは違い、柔らかく纏わり付いてくるような感触だった。結合部からジュワリツと溢れ出した愛液が肉茎を伝って流れ落ち、スバルの下腹部を濡らす。

「もっと……はあはあ……もっと奥まで挿入れるわよ」

更に腰が下ろされる。完全に蜜壺に沈む亀頭。肉茎にも褻が絡みつく。

そして――。

「んあんっ」

遂にペニスは膣奥に辿り着いた。根元まで完全にスフィアと繋がり合う。ペニスの先端が子宮口にキスをした。

「奥まで挿入ってるわ。ふふ……膣中ですごくドクドクっていつてるわよ。んっ、はあっはあっ……。さあ、それじゃあ動くわね」

子宮への接吻で終わりではない。妖艶に微笑むと共に、ゆっくり腰をくねらせてきた。

「あっ、だ、だっめ。せ、先生！こ、こんなのだ、駄目です。す、吸われる。せ、先生
のあ、アソコに吸われちゃうう」

肉壁が亀頭からカリ首、肉茎に吸い付いてくる。まるで身体の中身をすべて吸い出されてしまうかのような錯覚さえ覚えた。

「んっ、あっあっ……。どう？ 気持ちいいでしょ？ 男の感覚——病みつきになっちゃ

うんじゃない？ ほら、こうやって動かれると、堪らない気分になるでしょ？」

「ひっ、そ、そんなの——あっああああ」

どうすれば男が感じるのかよく理解している動きだった。ただ腰を前後に振るだけではない。リズムを刻むように、浅く、深く、時には腰を回してくる。

ぬちやつぬちやつぬちやつぬちやつ……。

響き渡る淫猥な水音。腰が蠢くたびに、ヒダヒダが外に捲れてピンク色の柔肉をさらけ出し、愛液で肉茎を濡らした。

「も、もうっ——」

手淫によって限界まで昂らされてしまっていた肉棒は、すぐに限界を迎える。

悲しそうなアリアの表情が一瞬視界に映ったけれど、最早止めることはできなかった。

「いいわよ。んっんっ……。射精しなさい。たっぷり先生の膈中に流し込むの」

「で、射精するっ！ 射精ちやうっ!!」

どびゅぶっ！ どびゅぶっ！ どびゅぶるるるうっ!!

肉先が開く。痙攣しながら、膈中に向かって白濁液を撃ち放った。

すべての思考が吹き飛んでしまいそうなほどの強烈な快楽が身を襲う。視界が真っ白に染まり、全身から力が抜けていった。

「あ、で、射精てるっ！ 熱いのが、スバルちゃんの熱いのが私の膈中に射精てるわ！ は、

はあああああ……」

射精を受けながら、スフィアはうつとりと瞳を細めた。

「すぐドクドクいつてるわ。まだ射精てる。んんん……私の膈中にとっても熱いのが広がっているわ……」

結合部からドロリツと白濁液が溢れ出す。膈中に精液を放ってしまった事実を突き付けてくるかのような光景だった。

（ごめん。ごめんアリア……）

彼女を救いに来たのに、これではあまりに情けない。自分の不甲斐なさに涙が溢れ出す。「泣いちゃ駄目よスバルちゃん。本番はここからなのよ」

が、泣いている暇さえ、先生は与えてくれなかった。白い肌を桃色に染めながら、先生は微笑む。

「ほ、本番って——あつ、んはあつ」

問いに答えるように、スフィアの腰が蠢き始めた。

射精を終えても硬くたぎったままのペニスを、肉褌が締め上げてきた。

「やつ！ ちょ、い、いま、いまは駄目っ！ だ、射精したばかりだから、そ、そんなに動かないでっ」

射精を終えたばかりで、肉体は敏感になってしまっている。肉茎や、カリ首に絡みつく

ヒダヒダの感触に、再び射精感が湧き上がってくるのを感じた。

「悪いけど止まれないわ。あつあつあつ……最後の一滴までスバルちゃんの精液を搾り取ってあげる。だから少し我慢してね」

じゅばんっじゅばんっじゅばんっ!

グラインドは激しい。腰と腰がぶつかり合い、湿り気を帯びた音が周囲に響いた。

「お願いです。こんな、アリアの前でなんて……うっうううう! はあつはあつはあつ……お願いだから許してください」

情けない姿を見せたくはない。

「も、もう止めてあげてよ……」

アリアも力ない言葉を向ける。

それでも先生は聞き入れてくれなかった。

「許してなんて嘘ついちゃ駄目よ。だってほら、スバルちゃんだって気持ちいいんでしょ? んっんっ、奥まで当たるおちんちん——すごく硬くなってる。あつ、んん……我慢なんかしちや駄目よ」

スフィアがいう通り、ペニスは射精前よりも硬くなってしまっている。この状況で許してくれなどと訴えても、説得力はなかった。

肉茎の太さが増す。蜜壺から引き抜かれるペニスに、愛液に塗れた肉壁が絡みつき、外

側に捲れていく。ズンツと膣奥をペニスで叩くたび、ビュツビュツと結合部から女汁が飛び散るのが見えた。この光景にどうしても興奮してしまうのを抑えられない。すると興奮に比するように、肉棒は更に大きさを増した。

「さ、最初に挿入れた時より大きいわよ。もしかしてもう射精したいの？」
腰を振りながら問いかけてくる。

「そ、そんなことないです」

もちろん認められるはずはなく否定するのだけれど、

「こんなに大きくなってるのには？」

肉体は正直だった。

ペニスは破裂しそうなくらいに膨張してしまっている。いつ精液が再び溢れ出してしまってもおかしくない状況だった。

「ほら、これでも耐えられる？ んっ、あっ……んんん……」

それをスフィアには見破られてしまっている。妖艶に微笑みながら、先生は肉壁を収縮させてきた。

「あっ！ こ、こんなの——こんなのす、すぐに！ あっあっ……くっ、ううう……。
ふぐっ、くっ、ふぐーふぐーふぐー」

(射精しちや駄目だ。射精しちや駄目だ駄目だ駄目だあ)

膣壁でペニスが押し潰されてしまうのではないかと思うくらい締め上げに、射精感が膨れあがる。これを押さえ込もうと必死に意識を集中させようとした。

「そういう姿可愛いわよ」

「——え？ んっ、んんん」

刹那、再びキスをされる。挿し込まれた舌によって、再び口腔を蹂躪された。

「んちゅっ、ちゅぶっ——ちゅっちゅっちゅっ、ちゅずるるるう」

口内を激しく吸われる。ジュルルツと下品な音を奏でられながら、唇を吸われると、それだけで全身から力が抜けた。どこか甘い匂いを含んだ先生の口臭に、脳髓が蕩けていく。このような状況で射精感を我慢することなどできなかった。

「あっあっふぁあぁあぁ」

ぶびゅぶっ！ どびゅびゅびゅびゅぶるるうっ!!

再び精液を放つてしまう。

「んっ……ふううう……に、二度目なのに本当に沢山。でも……んっんっ……まだよ。もっともっと気持ちよくしてあげるからね」

「も、もっとなって……あっ、ひっ！ 射精してる！ まだ、射精してるのにい！ んっ、んほおっ！ 動かないで!! 動かないでください！」

肉先からは未だに白濁液が溢れ出ている。だというのに、先生はまるで容赦してくれな

い。こちらの訴えなどお構いなしに、グラインドを再開する。

「駄目ですこんなの！ また、またイッチャー！ イッてる最中なのに、また射精ちゃいますっ!!」

精を放っている最中だというのに、再び湧き上がってくる射精感。頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

「はあっはあっはあっはあっ……いいわよ。イキなさい。沢山……あっんんん……沢山私の腔中にびゅっびゅっしていいわ。さあ、スバルちゃん。射精して。射精しなさいっ!」ぬじゅぶっ! じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ!

より上がるピストン速度。火照った蜜壺に飲み込まれ、下半身はドロドロに溶けてしまっているのではないかとさえ思えた。

「も、もう! また、またあっ!」

射精しながらの射精。

「んくっ! あっ、す、すごい。これ、いいわ。気持ちいい。んんんん。わ、私も……はあはあ……私もイクわ」

撃ち放つ精液で子宮を満たす。

「あっああああ! んあっ、あっあっあっ! い、イクっ! イクわっ!! わ、私もイク♥♥♥」

この瞬間、スフィアは眉根を寄せ、ビクンツと身体を震わせながら背筋を弓なりに伸ばした。小刻みに全身を痙攣させ、ブシュアツと結合部から愛液を噴き出して達する。

「あ、し、締まる。先生のアソコがきつくなる」

キュウツと肉壁が収縮し、脈動する肉茎を締め上げた。

「はあっはあっはあっ……」

「ふう♥ふう♥ふう♥ ……すぐく良かったわよスバルちゃん」

身体中から汗が溢れ出してくる。普段とは違い、なんだか汗が甘ったるく感じた。

「こ……こんなの酷いです」

涙が自然と溢れ出る。男としての矜持はズタズタだった。

その涙を先生が拭う。

「そんなに泣いては駄目よ。まだまだなんだから」

「……え？」

驚き、見上げるスバルの前で、スフィアはぺろりと舌を伸ばし、自分の唇を舐めた。

「も、もう無理です……。こ、これ以上はもう……」

肉体は限界に近い。それでも肉壁で締め上げられ、腰を振られるとペニスに熱くたぎってしまふ。

「まだ大丈夫よ。ほら……はあはあ……こんなに元気なんだから」

一度引き抜いた肉棒を見つめながら、熱い吐息混じりの言葉を向けてくる。掴まれる両足首。グイッと左右に大きく広げられる。

「や、やだ。こ、こんな格好恥ずかしいです」

いわゆるまんぐり返しの体勢だった。正確にはちんぐり返しというべきか……。

身体をくの字に曲げられる。目の前に自分の勃起した肉棒が突き付けられた。

散々犯されたペニスには、白濁液と愛液に塗れている。それでいてなお、萎えることを知らない。肉茎には幾本もの血管が浮かび上がり、艶やかな赤い色をした龟头は、不気味なほどに膨らんでいた。

「恥ずかしいおちんちんよね。こんなにいやらしく勃起させて……。スバルちゃんって本当に淫乱ね」

「そんな恥ずかしいこといわないください」

「恥ずかしくなんかいいわ。だってほら、私だってこんなに濡れちゃってるんですもの」
そういつてスフィアは立ち上がり、両足を左右に広げる。膣口はパツクリ口を開けていた。何度もセックスした為か、閉じようとしめない。膣中からはトロリトロリと白濁液が溢れ出してくる。

「ほら、一緒よ。もつと先生もスバルちゃんと一緒に気持ちよくなりたいの。だから、い

くわよ」

両足を広げられたまま、挿入が開始される。

「あっ！ んんんんん……すごく硬いわ。い、挿入れただけでイッちゃいそうよ」
男女が逆になったかのような体位だった。

「じゃあいくわね」

ぐじゅっ！ じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ！

「んあっ！ は、激しい。そ、そんなに腰を振らないでください！」

先生が腰を振り始める。まるで女を犯す男そのもののような腰の動きだった。体勢が体勢の為か、これまで以上に腰の動きは激しい。

「はあっはあっはあっはあっ……どう？ き、気持ちいいスバルちゃん？」

男女逆転したような状況に興奮しているのか、スフィアも熱に浮かされたような表情を浮かべながら問いかけてくる。

「き、気持ちいいです。気持ちいいから。もう、もうこれ以上はや、止めてください。お願いします。これ以上はもうっ」

体液と体液が混ざり合う。周囲に飛び散る汗が、噎せ返るような匂いを放つ。全身がドロドロに濡かされているようだった。それが恐ろしい。自分が自分でなくなってしまうような気がし、許しを請う。

「駄目よ。ほら、射精しなさい。私の膣中でイクの。んっ、ちゅっ、ちゅぷっ、くちゅっくちゅ、んちゅるう」

訴えても腰の動きを止めてはくれなかった。それどころかむしろ速度は上がる。その上、キスマでしてきた。

「ふちゅっ、んちゅう」

挿し込まれた舌に、スバル自身も自然と自ら舌を絡めてしまう。

ぬちゅぐつぬちゅぐつぬちゅぐつ！

深い深いキスを交わしながら、互いに腰を振り合った。最早自分の意思で止めることなどできない。

「で、でふ……ふちゅっ、んちゅっ……も、もうでちやいまふ……」

「いいわ。射精していいのよ。沢山びゅっびゅっしてなさい……。私の膣中にいっぱい流し込んで」

優しく頭を撫でられる。酷いことをされているというのに、唇を重ね合いながら繋がりが合っていると、何故だか愛おしく見えてしまった。

「い、イクうっ！」

高まる感情が射精感に変わる。

ぶびゅっ！ どびゆるっ！ びゅっびゅっびゅぶるるうっ！



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



三次元リアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



ニャックンリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!**19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic-Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!